

待っている

校門の両脇に銀杏の樹が二本。ロータリーの中央に楠の大樹が一本。この二本の樹は旧校舎から移植されたもの。新しい地で枝を広げ、緑を濃くし、年輪の重みを漂わせて、歴史を刻んでいます。六月、女子バスケの生徒が、この樹の根元の草を取り、ベゴニアを植えました。今、猛暑の中に可憐な花が咲いています。よく見ると、毎日、毎日、古い花が落ちて新しい花を着けているのです。菅原道真の詩に、「花の心は人の心に似ることを得ず、一たび落ちて、再びたづぬべきこと難かるべし」というのがあります。花は一度散り落ちてしまえば、再び同じ花をたずねることは難しい。お互いに「違う花」になって再会したい、今よりも、もっと成長して立派な花となって再会したい、このような意味だと思えます。夏休みが終り、この学び舎に全校生徒が登校してきます。大きく成長した生徒を、この大樹も、この可憐な花も待っているのです。

平成十九年 八月三十一日

国府はがき通信

No61

スポーツは屈伏しない

最後に、キャッチボールをして、特攻機に乗り込んで、散っていった若者。八月の声を聞くと、こんな話をよく聞く。

「危機にもかかわらず、あるいは危機ゆえにスポーツは屈伏しなかった。」フランスのスポーツジャーナリスト、ブノワ・ハイマーマンは語っている。今夏の高校野球の熱戦を見ると、なるほどと思う。特待生問題で高校野球は危機に瀕していた。特待生という誇りを持って生活していた者が、ある日突然、「お前たちは罪を犯した。一ヶ月の謹慎である」と言い渡されたのである。生徒にとつたら、こんな理不尽な事はない。退学しなければならぬ。親の事を思い、経済的な事を思い、友達の事を思い、学校の事を思い、眠れない日々が一ヶ月以上も続いた。そして、やっと謹慎が解けた時、若者は必死に練習をした。必死に汗を流した。甲子園を見ると、そんな若者が泥だらけになって闘っている。スポーツは屈伏しなかったのだ。

平成十九年 八月二十四日

国府はがき通信

空気が緩む時

「絶対に泣いたらいけません。歯を食いしばって、我慢しなさい。」母の教育であった。私は忠実に守った。どんな時も、先生から叱られたら、睨みつけて、泣かなかった。歯を食いしばって我慢した。おかげで、何ぱつも打たれた。母の教育は間違いである。「すぐに泣きなさい。大声で泣きなさい。ともかく謝りなさい。」と、親は教えた方がいい。今、本校では、練習試合が毎日行われている。他県から、セミナーハウスに合宿している学校もある。試合中によく監督から怒鳴られている。「お前は何やってんだ。わかっているのか。」「ハイ」素直な、大きな返事だ。泣いている生徒もいる。そして、また同じ失敗をする。「何を聞いているのか。返事だけか。心では何とも思っていないな。」「ハイ」思わず生徒が返事して、みんな笑った。夏の暑い日、その時だけ、きんと締まった空気が緩んだ。

平成十九年 八月 十七日

国府はがき通信

夏の夜の出来事

薄暗くなっていた。私は疲れきって、車を走らせていた。「こんな時が一番あぶない、用心、用心。」声を出して、目をしっかり開けて運転していた。その時だ、左の小道から自転車が飛び出して来た。慌ててブレーキを踏む、自転車とすれすれのところで止まった。制服をだらしなく着た男子高校生だ。「馬鹿野郎」叫んだのは自転車の方。「どっちが馬鹿だ、命を大切にしろ」私が怒鳴った時は、もう自転車はいない。猛烈なスピードで闇に消えた。「なんとという高校だ。どんな教育をしているのか。」思わずつぶやいて笑ってしまった。いつも私どもが言われる事だ。自転車の乗り方まで、学校の責任にされたらたまらない。しかし、制服というのは、その学校そのものを着ているということが、良くわかった。たった一人の生徒のために、学校全体が判断される。その学校が評価される。そのことが頭を離れなくなった夏の夜の出来事であった。

平成十九年 八月 十日

国府はがき通信

走れ、できるだけ遠くへ

朝七時過ぎには進学準備室に冷房が入ります。何人かの生徒が勉強に来ています。机に座ると黙々と鉛筆を走らせます。ここに来る生徒は部活動などには関心がないだろうと思っていました。ところが、野球が惜敗した翌日、「先生、残念でしたね。けれどまだ一年生と二年生でしょう。今からが楽しみです。いつも応援していますよ」と言ってくれたのです。自分だけの勉強をしているように見えた生徒にも赤い血は脈々と流れているのです。母校を思う気持ちに満ちあふれているのです。明確なゴールを持っている者は一瞬だって時間を無駄にはしません。真つすぐに物を見つめ、他の事は目に入らないように見えます。だからと言って、自分の学校に無関心ではないのです。鉛筆を走らせながら野球の試合に一喜一憂していたのです。青葉が夏の光をはね返す学び舎で、それぞれの生徒が、それぞれの道を懸命に走っています。できるだけ遠くに行けるように。

平成十九年 八月 三日

国府はがき通信

学校

「さあー、夏休み」とばかりに蝉が鳴いています。校内の樹々も夏の光を浴びて輝きます。気分的には何か開放されるのですが、忙しさは少しも変わりません。補習、課外、研修会、研究会、部活動、学習合宿・・・世間では「先生は良いなあー。夏休み冬休みがあつて」と本気で思っている人もいます。私どもの仕事は常に成長する生徒が相手です。どんな時も、緊迫感があります。何かあると、学校が悪い、教師が悪いと言われ続けます。そして、次から次へと制約が出来て来ます。時々、叫びたくなるのです。「私たちを束ねないください。」と。ある詩人がこう書いています。「学校、あの不思議な場所。校門をくぐりながら蛇蝎のごとく嫌ったところ。飛び立つと森のようになつかしいところ。今日もあまたの小さな森で、水仙のような友情が生まれ匂ったりしているのだらう。」私どもはいろいろあつても、この学校が結局大好きなのです。

平成十九年 七月 二十七日

国府はがき通信

伝統

八代球場、校歌が流れます。生徒が大きな声で歌います。4対3。延長11回サヨナラ勝ちです。岩代浩一作詞作曲の実に格調高い校歌です。野球部創部2年、今、まさに伝統がひとつずつ積み上げられているのを感じます。伝統とは結局は、そこにいる人間が作るもの。あらゆるものが、時代と共に変わって行きます。変わらないのは、そこに人が生きていくという事。その人々が築き上げたものの中で後の世の人が自覚と誇りを持って、受け継ぐもの、それが伝統だと思ふのです。心がスウイングすると、目には見えなくても、そこに光や熱や風が起きます。人が何かに全精力を傾けて入れあげた時、効果はいつか必ず実るものです。懸命に打ち込んだことが無駄になることなど決してないのです。その積み重ねが伝統となるのです。福岡から励ましの電話をいただきました。帰省した時、野球部の生徒がさわやかに挨拶したとの事。これも伝統にしたいものです。

平成十九年 七月 二十日

国府はがき通信

大賀はす

長雨が一瞬、止んだ。澄んだ水面に茎を伸ばして咲いている大賀はす。二千年も力をじつと、内へ内へとためて、昭和の御代に姿を表わした花。雨雲の下で華やかに、美しさを広げている花。古代人も、あるかなしかの芳香を求めて、蓮見の宴を開いたのだろうか。風立ちぬ縄文の蓮ひらくとき（梶田悦堂）「国府高校におじゃまいたしました。念願の大賀はすに会いに行つて参りました。二千年の眠りから目を覚ましたはすの美しいピンク色に、うっとりいたしました。一緒に行きました母も、素晴らしいはすを見ることが出来て、喜んでおりました。」村上英子様からのあざやかな写真つきのお手紙である。今、本校には大賀はすを見たいと、たくさんの方々がおいでになる。少しでも気持ち良く見てもらいたいと、中庭の茎を刈っている先生もいる。魂をよぶ花、大賀はす。七月十六日、午前九時 大賀はすを愛でる会 ご来駕お待ちしています。

平成十九年 七月 十四日

国府はがき通信

若いパパ

卒業生が赤ちゃんを抱っこして来ています。若いパパです。先生方が入れ代わり立ち代り話しかけます。「可愛いね。お前に似ているじゃないか。日本の少子化対策に協力しているな」「どれどれ、俺にも抱っこさせる。これは重い！将来は国府高校の砲丸投げの選手だ。」「その頃まで先生はおられますか。」「あと十五年か、ギリギリだな。」「女子の卒業生が赤ちゃんを連れて来るのは多いのですが、男子が来るのは珍しいことです。男女共学になって十三年目、男子の卒業生も増えていきます。」「古いあの手と、新しいこの手」 本校にはどちらも大切です。私も現代人は、いつデラシネになってしまうかもわからないという不安にかられます。そのような時代に子供を見せに来る母校があるというのは、素晴らしい事だと思つたのです。私立高校の良さは、実にこのような家庭的なあたたかさにあるのかもしれない。

平成十九年 七月 六日

国府はがき通信

No53

遠雷

遠雷が鳴っています。真黒な雲が広がっています。いよいよ本格的な雨期がやって来ました。早朝から、トレーニング服で学校に行きます。激しい雨に濡れても良いようにとポンチョも用意します。

生徒はこんな日は来てないだろうと思って、校門に入ると教室にはもう灯りがついています。朝課外にほとんどの生徒が来ているのです。

七時三十分、課外開始です。各教室で一斉に学習が始まります。毎日毎日をしつかり過ごすことで、必ず見えてくるものがあるはず。今、生徒は夢の扉を必死に開けようとしているのです。

こんなに一生懸命な生徒がいる。それに応えられる学校であり続けたい。そう思うのでいっぱいになります。

遠くでまだ雷が鳴っています。

平成十九年 六月 二十九日

国府はがき通信

No52

わからない

「昨夜ねむれませんでした。」一メートル八十センチ以上もある大きな生徒が立っている。「なぜ、はしかと言っているのでしょ。語源はどこから来たのでしょうか。それを考えたら眠れませんでした。」あまりの突飛な質問に何と返事して良いかわからなくなった。私もあらゆる辞典、家庭の医学書等調べたがわからない。英語では measles。常に複数形で単数扱いとある。これもわからない。はしか患者、過去最高と新聞には大きな記事、学校では休校する所も出ている。昔は「はしか」なんか問題にはならなかったのに、どうして今年は大騒動になるのだろうか。

「君は素晴らしいところに疑問を持ったね。私も調べたがわからない。勉強になったよ。」
「先生人生ってわからない事ばかりですね。」哲学者みたいな事を言って、生徒は出て行った。

平成十九年 六月 二十二日

国府はがき通信

No51

汗

高校総体で優勝した翌早朝、ハンドボール部の生徒が添削指導のプリントを取りに来る。「優勝おめでとう。新聞に君の顔が出ていたね。教室での君の顔も素敵だけど、別人みたいに美しい顔だったね。」久保先生が冗談を言いながらプリントを渡す。優勝しても浮かれる事なく、すぐに勉強に取り組む姿勢が嬉しい。

学校にはこのように素晴らしい生徒がいっぱいいる。試合前も、試合が終わっても、植木の草を取っている女子バスケット部、ビニール袋を持って校舎内外の塵を拾っている陸上部、日誌を毎日監督に見せに来る野球部、このような生徒を私どもはつつい見逃してしまう。挨拶、服装、言葉使い。高校生として当たり前前の事をちゃんとしている生徒。そんな生徒に私どもはもつと目を向けて良いのではないだろうか。人の目のつかない所で美しい汗を流している生徒はいっぱいいるのである。

平成十九年 六月 十五日

国府はがき通信

No50

初夏の風の光

「先生、パソコン使って良いですか。」進学指導室に瞳の美しい生徒がやって来た。ぱちぱちと素早くキーを叩くと、画面に大学があらわれる。「大学受験、大変だね。高校総体の時も勉強かい。どこか応援に行くの。」「高校総体は、試合に出ます。ソフトボール部です。一応レギュラーです。」六月一日、私は家族を連れて、ソフトボールを応援に行った。いた！。あの生徒だ。なんと、キャッチャーで四番。私を見かけるとニコツと笑う。学校での姿とはまた違う美しさだ。激しい闘志を前面に出して、チームを引っ張っている。十対〇、試合は勝った。高校総体、本校生の活躍は見事であった。優勝はハンド男女、バスケ男子、陸上男女砲丸、女子やり投げ、女子円盤。準優勝はサッカー。三位は女子バスケット。本校は二日にわたって、全校応援を繰り出したのだ。どの会場もさわやかな初夏の風が光っていた。

平成十九年 六月 八日

国府はがき通信

念ずれば全国大会

寒い冬の日、松葉杖をついて練習を見ていた生徒がいた。今は何とかプレーが出来るようになっている。しかし「お前はまだ無理だ、見学しとけ」監督のいたわりの声。「ハイ」背中が震えている。

いよいよ、高校総体が六月一日から始まる。この日のために、全てを懸けてきた生徒。コートの外で、祈るような目で下級生のプレーを見ている。「いいか。お前たちが三年生を全国大会に連れて行くのだ」下級生に檄を飛ばす監督。緊迫した練習が続く。

人の思いには強さにおいて、三つの段階がある。「思い」とは瞬間的に消える方向性のないもの。「想い」とは方向性や継続性のあるイメージ。「念い」とは創造性と物理的な力を持った念力の念。まさに「念ずれば花ひらく」である。今、熊本国府高校の部活は高校総体に向けて「念ずれば全国大会」の念りで燃えている。

平成十九年 六月 一日

国府がき通信

命のバトン

本校の正門を入りますと、ヨーロッパ風のレンガ色の階段が目に入ります。そこを上がると事務室です。いつもさわやかな風が吹いています。どんな時も笑顔できびきびと応対してくれます。休み明けになりますと、ジョウロを持った先生方、事務の方々を早朝から見かけます。花壇の水掛です。いつも美しい花が咲いています。

よく見ると、その花の種が落ちたのでしよう、セメントの割れ目からペチュニアの花がふたつ咲いています。紫の可憐な花です。命のバトンがこんな所にも繋がっているのです。考えてみますと初夏という季節はこの命のバトンが渡っている季節ではないでしょうか。楠の大樹も竹林も古い葉が落ちて、新しい命が萌えています。高校時代、それは若い命がぐんぐん伸びていく季節です。在校生もこのペチュニアのように逞しく美しく命を輝かせて欲しいと思うのです。もうすぐ高校総体総文が始まります。

平成十九年 五月二十五日

国府はがき通信

強歩会

「江津湖が見たい」と亡くなる前の母。あわてて車に乗せて江津湖を走った。「娘の頃、ここで泳いだ事があるの。ボートにつかまってバタバタさせてね。」九十才の母は、目を遠くに投げながら。ほんのりと頬を染めて話した。それが母と交わした最後の言葉になった。

その江津湖に、朝七時半に集合して、本校の強歩会が行われた。創立以来、六十五年になる伝統の行事だ。昔は午前二時に集合してわらじ履きで歩いたと言う。「一週間は足が痛くて階段を上るのに這って上がった」と今でも卒業生は懐かしむ。今の高校生にとって、三十キロを歩くのは実に辛い事だ。最後の生徒がゴールに辿り着いたのは午後三時三十分。みんな足を引き摺っている。この生徒達も年を取って、自分の子供に「高校時代この江津湖を出発して三十キロも歩いたのだよ」と話してくれるにちがいない。

平成十九年 五月十八日

国府はがき通信

No46

愛がいつぱい

あさがおさん

おげんきにいますか

はい

いますよ

藤根俊子（小一）

朝顔さんとの心の交流があります。愛があります。

本校にも冬に花のたねに「おげんきにいますか」と問いかけて、見事に美しい花を咲かせる先生がいます。その咲いた花を学校のちよつとした所に生けておられます。今朝はどんな花が私たちを迎えてくれるのだろう。わくわくしながら登校します。そこには愛がいつぱいなのです。

平成十九年 五月十一日

国府はがき通信

No45

夏にふさわしい、可愛い詩だと思ってしまいました。しかし季節は夏ではないのです。冬なのです。この「朝顔」とは「朝顔のたね」なのです。夏になつたら大きな花が咲きますように「おげんきにいますか」と問いかけているのです。すると黒い粒のたねは「はい、枯れてなんかいませんよ」と答えます。ここには、小学校一年生の女の子と、

教師というもの

今朝は嬉しいお電話がありました。七十四歳の女性の方からです。本校の生徒がさわやかに挨拶してくれて、気持ちが良いとの事です。私どもは、外からの電話と聞くと、また苦情の電話かと思ってしまうのです。電話を取ると、いきなり怒鳴られる事もあります。「お前の所はどんな教育をしているのか。自転車を横並びにして走っているではないか。」私どもは、ただ、頭を下げてあやまるばかりです。本音を言いますと、どうかその時、叱ってください。その場で教育してください。と言いたいのです。その時は何も言わないで、すぐに学校に怒鳴り込んでくる。しかも、匿名。確かに生徒は悪い。そう思っけていても、あまり悪口雑言あびせられますと、良い気持ちにはなりません。自然と生徒をかばっている自分に気が付きます。今朝のように褒められますと、つい嬉しくなつて他の人に吹聴したくなる。これが教師というものでしょうか。

平成十九年 五月二日

国府はがき通信

出会い

「先生、この本を貸して下さい。」掃除に来る生徒が机に立てていた本を指差した。「出会いを生かせば、道は開ける」。という本である。生徒は掃除をしながら、私の机の本を隅から隅まで見ているのだ。

「出会いはただの点にしかすぎない。その小さな点をつなげて、線にして、またそこにたくさん情報を盛り込んで、面として広げていく。そのことで、出会いは色々な可能性を自らどんどん生み出していく。」このような事が書いてある中村昭氏の本である。

「国府高校は君のふるさと。そのふるさとを良くするのは君だ。国府高校での出会いを大切に」こんな言葉を裏表紙に書いて、この生徒に贈った。今から、数多くの本を机に並べて置こうと思う。ここから私と生徒の出会いが始まる。

平成十九年 四月二十七日

国府はがき通信

No43

漆黒の闇

気がつくくと、もう桜の季節が過ぎて、初夏の日差しが見えて来ました。高校時代は青く明るく深い深さに、吸い込まれるような喜びに浸る時でもあります。しかし、一方では漆黒の闇の中に、ひとり彷徨する時もあります。

今日も暗い目をして、早退しようとした生徒がいました。何を聞いても、ただ、重い息を吸って吐き出すばかりです。やがて、ぼつりぼつりと話出した事は、両親の離婚の問題。毎日毎日、夫婦の怒声の中にいるのと。大好きなお父さんお母さんが別れる。その事が頭から離れないで、もう学校どころではなくなったのです。このような問題になると、私もはどうする事も出来ません。話を聞いて、聞いて、一緒に辛い気持ちになるだけです。そして、今の季節のように、生徒が内によみがえる新たな力を、出してくれるのを、辛抱強く待つだけです。

平成十九年 四月二十日

国府はがき通信

No42

人の道

人は知らず知らずに、多くの方々や世間から物心両面に渡る恩恵を受けながら、一人前に成長していくもののようなものです。その受けた恩をどれだけ返せるのか、借りたものは返すのが人としての道であるけれど、実際には極めて難しい。ただ借りを返しただけでは、返しきれない貴重な恩恵がその中に含まれているからです。結局は「自分の出来る限りの力を尽して、何か人のために役に立ちたい。受けた恩を何かでお返しをしたい。」と、そう思って生きていくだけです。高校というのはその人の道、人の心を教える時代だと思えます。当然のように高校に来て、勝手気ままな生活をする生徒に、人の心を教える時代のような気がします。

四月九日、本校の入学式が終わりました。青空に鯉のぼりが泳ぐ校門を三百四十三名の新入生が入学して来ました。まず、私どもは、ひとりひとりが今までに受けている恩恵について、教えたいと思っています。

平成十九年 四月十三日

国府はがき通信

一輪の桜

桜の花が咲いている。他の桜は満開なのに、この桜はたった一輪。まだまだ小さい桜の木、それでも天に向かってぐんぐん伸びている。

水上大貴君の桜だ。

国府高校一年生の時に発病、想像に絶するほどの治療と孤独な入院生活、二年生の九月から登校。「学校に来られるだけで幸せです。」そう話してくれた大貴君。掃除など進んで手伝い、少しでも友人と長く居たい様子だった。入院、退院の繰り返し。その間、県簿記検定二級合格、体育大会参加、クラス全員での熊本養護学校の体験入学、前向きにいつもいつも努力していた大貴君。しかし、卒業を目の前にした二月、とうとう天国に逝ってしまった。「大貴が大好きだった国府高校に植えてください。」とご両親が持つてこられた桜の木。その桜が今年もやっと花をつけました。まだ、たったの一輪だけ。

平成十九年 四月六日

国府はがき通信

No40